

スペイン語圏を知る本（その65）

西川和子 著

『ビウエラ七人衆：ギター前史：スペイン宮廷楽士物語』

（彩流社、2012年）

評者 坂東 省次

関西の音楽の殿堂といえば、大阪音楽大学である。そこにはまた立派な音楽博物館がある。世界各地の楽器が所狭しと並べられており、音楽ファンにとってはじつに興味深い音楽空間である。

館内の奥に設置されている展示ケースには多数のギターやリュートが展示されているが、それらの中の1本がビウエラという楽器である。現存する、当時のビウエラは世界に3本あるといわれるが、むろんここにあるのはその内の1本ではなく、日本製である。

ところでビウエラとはいったい何なのだろうか。『標準音楽辞典』の「ビウエラ」の項を見ると「16世紀スペイン宮廷を中心に用いられた一種のギター」との説明がある。

浜田滋郎の『スペイン音楽のたのしみ』を見ると、このビウエラについて数ページが割かれている。それによれば、「ルネサンス・スペインにおいて愛用された宮廷的なギターの種類」と定義されている。当時、他のヨーロッパ諸国ではリュートが使われていたが、スペインだけは高尚なギターとしてビウエラが使われていたということになる。

浜田はビウエラ用作品を残した七名の“ビウエリスタ”（この楽器専門の演奏家兼作曲家）の名前と数行の説明を加えている。ここまでがこれまでの日本人のビウエラの知識であった。



（大阪音楽大学音楽博物館所蔵）

この度上梓された西川さんの『ビウエラ七人衆：ギター前史：スペイン宮廷楽士物語』は、スペイン黄金時代に一世を風靡したビウエラの歴史を、ビウエラの楽譜を後世に残した七人の

ビウエリスタ（ミラン、ナルバエス、ムダーラ、バルデラーバノ、ピサドール、フエンリャーナ、ダサ）の生涯を通して考察したものである。

西川さんは『スペイン宮廷画物語：王女マルガリータへの旅』の出版から始まって続々とスペインの宮廷物語を出版しており、スペイン宮廷に関してはいまや右に出る者がいないほどの専門家といえる。西川さんはスペイン宮廷に関する豊富な知識を駆使して、七名のビウエリスタの非常に複雑な人生行路を見事に明らかにしたといえよう。

七人は次のように定義されている。

1. バレンシア宮廷には、優雅で気品あふれるミラン
2. カール五世の側近コボスの館には、自信家ナルバエス
3. 大公貴族のもとから聖職者へ、宿命だったムダーラ
4. 謎のビウエリスタ、繊細で優しいバルデラーバノ
5. 宗教界大物の孫、一途で甘美なピサドール
6. 美しい音の流れを求めた、フエンリャーナ
7. 時に遅れて生まれた、ダサ

ビウエラは、カール五世やフェリーペ二世が活躍したスペイン黄金時代に突如現れ、王侯も貴族も聖職者をも虜にし、高位な階級の人たちだけでなく、裕福な中産階級を巻き込んだといわれる。ところが、フェリーペ二世の時代が終わる頃に突然姿を消してしまった。

ビウエラが突然、消えた。なぜか。著者は、次の四つの消滅理由を挙げている。1) ギターの台頭、2) 厳格さが支配する社会の衰退、3) ポリフォニー世界の変化、4) 貴族のつながりの希薄化、である。

「ビウエラの音楽は静かです。何と言っても高貴な音が響きます」とは、著者の言葉。一度は聞いてみたいものである。

ばんどう しょうじ（教授・スペイン語学）